

タイトル	敗戦後日本社会の形成 : 朝鮮と向き合わない日本
著者	水野, 邦彦; MIZUNO, Kunihiko
引用	季刊北海学園大学経済論集, 61(4): 95-108
発行日	2014-03-30

《論説》

敗戦後日本社会の形成

— 朝鮮と向き合わない日本 —

水 野 邦 彦

I はじめに — 植民地意識なき植民地支配 —

1910年以來、姜在彦によれば実質的に1906年以來¹⁾、1945年にいたるまで日本は朝鮮を植民地として支配した。このかん日本は朝鮮にたいして「1910年代は土地よこせ、20年代は米よこせ、30年代後半から45年までは人よこせ、命よこせ」²⁾と象徴される収奪を重ねてきたが、そのさい、日本が朝鮮を支配していることを日本人に意識させないように仕向けていたことに留意すべきであろう。1919年の三一独立運動ののちに日本の首相・原敬が「朝鮮は日本の版圖にして屬邦にあらず、また植民地にあらず、即ち日本の延長なり」という声明を出し、朝鮮総督・長谷川好道が「朝鮮は即ち帝國の版圖にして其の屬邦にあらず、朝鮮人は即ち帝國臣民にして内地人と何等差別あるにあらず」と述べたのは、朝鮮という独自のものを否定し、朝鮮を日本に吸収しつくすことによって、朝鮮の存在をなくし、朝鮮と日本との対立をなくそうとする意図があったとみられる。したがって日本の朝鮮支配は、意識のありかたとしてみれば、支配者意識を缺く支配であり、植民地意識を缺く植民地支配であった。こうした姿勢は「日本が朝鮮を支配した時代には、朝鮮を植民地と呼ぶことすら禁断されていた」ことに端的にあらわれている³⁾。しばしば日本が朝鮮を蔑視してきたことが強調されるが、それは朝鮮と日本との相違や朝鮮の異質性をみとめたうえで蔑視したというより、そもそも朝鮮の存在をみとめず朝鮮を日本のなかに組みこみ、そのうえで日本人でない朝鮮人にたいし軽視と無視を、そして陰に陽に蔑視と差別を重ねてきたというべきであろう。朝鮮人の居場所である朝鮮の地も日本人によって奪われたが、当時すくなくとも日本人はかの地が日本であると認識するように仕向けられていたのである。この意味で日本は朝鮮を軽視ないし無視してきたといえる。

いわば朝鮮のとらえかたが歪んでいたのであるが、この歪みは朝鮮植民地支配の肯定に根ざすもので、支配が強まるにつれて歪みも増した。学術的と称される朝鮮研究が高度になっても歪みは正されるどころか学術的よそおいをもって拡大していった。その例が征韓論、脱亜論、大アジア主義、日鮮同祖論で、これらは朝鮮文化が価値のないものであるとみなす点で共通している。このような朝鮮観の歪みを正す道は植民地支配に反対する立場においてのみ可能であったと旗田巍はいう⁴⁾。

1) 姜 在彦『日本による朝鮮支配の40年』朝日文庫、1992年、17-18頁をみよ。

2) 姜 徳相『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、1997年、v頁をみよ。

3) 旗田巍『日本人の朝鮮観』勁草書房、1969年、79-80頁をみよ。

4) 旗田巍『日本人の朝鮮観』42頁、46頁をみよ。

朝鮮にたいする軽視ないし無視は、日本が朝鮮を植民地支配していた時代にかぎらず、敗戦後もつづいた。これが根本的原因となって、のちにみる日本人の加害意識缺如や歴史的自己意識缺如、責任意識缺如や朝鮮にたいする無知・無関心をひきおこしたと考えられる。

II 朝鮮軽視の事象

1945年以降も日本が朝鮮および朝鮮人を軽視ないし無視し、差別してきたことを示す例には事缺かない。

広島・長崎の原爆投下で被爆した人々のなかには、とうぜん朝鮮人がふくまれていた。日本有数の軍需都市であった広島では、陸軍部隊・軍施設や三菱重工業機械製作所・造船所などの軍需工場に何千人もの朝鮮人が就労していた。長崎もまた軍需都市であり、三菱長崎造船所だけで7000人もの朝鮮人がいた。広島では爆死者約16万人のうち約3万人が朝鮮人、長崎では爆死者約7万4000人のうち約1万人が朝鮮人であったと推定されている。被爆しながらも生き残った朝鮮人のうち、広島の約1万5000人、長崎の約8000人が、帰国していったとみられる。ところがこの人々は帰国しても生活の基盤がなく、貧困に苛まれる暮らしのなかで、自国で適切な治療を受けられず、苦難の人生を送ることになる。その後の被爆者にたいする援護や保障の可能性は、日韓条約によってつぶされた⁵⁾。

1950年に勃発した朝鮮戦争は、日本にとってけっして他人事でなかった。朝鮮戦争を機に米国の対日政策は軍国主義・国家主義除去から対共産主義戦力再建へと転換し、日本人戦犯らの公職追放が解除され、それにともなって戦前日本にたいする反省を曖昧なまま終わらせることになった⁶⁾。朝鮮戦争は日本にあらたな現実を押しつけ、「日本が置かれている現実について、新たな自覚をするように日本人に迫って来た。すなわち、日本はアメリカに占領されているという現実、……戦争に巻き込まれうるという現実」⁷⁾である。米軍がB29を朝鮮に向けて飛ばしていた伊丹基地の近くで朝鮮戦争協力に反対する約1000人が起こした吹田事件は、朝鮮戦争勃発から約2年後に起こった。また、戦争で儲けること、戦争特需によって日本の景気を回復することを日本人に意識させたのも、朝鮮戦争であった。

朝鮮戦争を前後して日本でいわゆる逆コースの傾向があらわれ、それに対抗するように米国占領からの民族独立が主張されはじめた⁸⁾。民族独立は左翼的ナショナリズムの発露ともいわれるが、ここではもっぱら日本人と米国人が念頭に置かれており、日本に住みついていた在日朝鮮人のことは意識から抜け落ちていた。こうして在日朝鮮人の存在が左派をふくめて日本人の意識にほとんどのぼらない時代がつづいたのである。

日本はけっきょく単独講和（片面講和）のサンフランシスコ条約で米国の庇護下に入ったため、西洋列強が植民地をうしなしたときのような脱植民地意識や責任意識が稀薄なまま、戦後の再建をすすめることになった⁹⁾。

朝鮮人密入国者を強制送還時まで「船待ちさせる、施設として1950年に設置された大村収容

5) 市場淳子『ヒロシマを持ちかえった人々』凱風社、2000年、27-37頁をみよ。

6) 三浦永光『戦争と植民地支配を記憶する』明石書店、2010年、44頁をみよ。

7) 海老坂武『戦後文学は生きている』講談社現代新書、2012年、119-120頁。

8) 日高六郎「明日の日本を考える」日高六郎編『明日の日本を考える』筑摩書房、1988年、281頁をみよ。

9) 中村政則『戦後史』岩波新書、2005年、126頁をみよ。

所では、韓国独裁政権に荷担する出入国管理令にもとづきつつ、日本人が戦前と同じ威圧的態度で朝鮮人を管理していた。のちにヴェトナム戦争忌避の亡命軍人となる金東希も1959年から1960年にかけてここに収容されており「日本がアメリカに向ける顔、ヨーロッパに向ける顔、朝鮮に向ける顔は似ても似つかぬ二面相であり、朝鮮人に向けているその顔が本当の顔であった」と書き残している。朝鮮人、とりわけ北を支持する朝鮮人に暴行を加える日本人警備官の態度は、変わらぬ朝鮮人軽視ないし蔑視の一面をみせていたのである¹⁰⁾。

III 責任意識の脱落

戦後日本最大規模の政治運動というべき安保闘争の昂揚について中村政則は5つの要因をあげている。「第一に、『戦争はもうこりごりだ』という反戦・厭戦感情が基本にあって、それがナショナルな規模で噴出したのであり、革命運動でも反米運動でもなかった。第二に、岸信介が戦中、東条内閣の閣僚であったことが、国民の反岸＝反安保感情を刺激した。第三に、安保闘争と同時並行で闘われていた三池争議をみてもわかるように、ナショナルセンターの総評や労働組合(炭鉱労働組合、国労・動労など)が戦闘心を失っていなかった。安保闘争の中心に元気な労働組合が存在していたことが大きい。第四に……新しい市民の登場が運動に厚みを加えた。……第五に、五・一九強行採決に怒って立ち上がった国民の運動は、まさしく民主・護憲の運動でもあった。安保以後、戦後一五年にして、日本に議会制民主主義が定着し始めたのである¹¹⁾。みられるように、反戦・厭戦感情、反岸＝反安保感情、戦闘的労働組合、あらたな市民運動、民主・護憲の運動が、安保闘争をささえたとされる。これはこれで貴重な原動力であったというべきであるが、たとえば反戦・厭戦感情が「『唯一の被爆国』としての戦争体験、戦争の被害者としての国民的体験¹²⁾」によって醸成されたものであるとすれば、加害者としての日本および日本人は、戦後いかなる感情や意識を生んだのだろうか。そもそも日本および日本人に加害意識があったのだろうか。

戦争責任の古典的論考は家永三郎によって1985年に書かれている。「純戦後世代の日本人であっても、その肉体は戦前・戦中世代の日本人の子孫として生れたものであるにとどまらず、出生後の肉体的・精神的成長も戦前世代が形成した社会の物質的・文化的諸条件のなかでおこなわれたのであった。換言すれば、純戦後世代の心身は、戦前世代の生理的・社会的遺産を相続することなしには形成されなかったのである。……日本人としての自己形成において戦前世代からの肉体的・社会的諸遺産の相続を放棄することは不可能であるのだから、戦争責任についてのみ相続を放棄することもまた不可能である。……民族としての日本人の一員に属するのであれば、民族の一員として世代を超えた連帯責任から離脱できないと考えるべきである。……国家・民族に所属する一員として世界人類社会に生きているかぎり、国家・民族が集団として担う責任を分担する義務を免れないのは当然ではないか¹³⁾。

ここでいわれる「戦前世代からの肉体的・社会的諸遺産」には、朝鮮人差別もふくまれるであ

10) 朴 正功『大村収容所』京都大学出版会、1969年、4頁、12頁、18頁、118頁をみよ。

11) 中村政則『戦後史』75-76頁。

12) 文 京洙「戦後日韓関係と市民社会の課題」藤田和子ほか編『新自由主義に揺れるグローバル・サウス』ミネルヴァ書房、2012年、354頁。

13) 家永三郎『戦争責任』岩波現代文庫、2002年、338-340頁。

ろうから、民族としての日本人は他民族にたいする差別ないし差別意識をも継承しているといわねばならない。この点で家永三郎のいう戦争責任は、1968年に木下順二によって示された見解と共鳴する。「……私自身、個人的には、朝鮮の人々に対しても……差別を行なった記憶はなにか一つない。が、にもかかわらず私たちは私たちの父の代、祖父の代、それより以前の代々によって、個人的な私たち自身とは関係なく犯されたところの、他民族と自民族に対する差別の罪からのがれることはできないのである。それは私たちの負わねばならぬ原罪である。感傷からそういうのではない、そのように思いこまぬ限り——そのようなふうに『罪の意識』を私たちが私たちの内に持たぬ限り、差別という不合理はこの世から消えてなくならないと思われるからそういうのである」¹⁴⁾。

否応なく戦前世代・戦中世代に連なる民族の一員として世代を超えた連帯責任を負っている私たちが、それを自覚的に「思いこむ」努力を怠っていないはこの世の差別はなくなるといえる。家永三郎や木下順二の姿勢はいまなお私たちが肝に銘ずべきものである。

IV 日韓条約と在日朝鮮人

多くの共産主義者をふくむとみられる在日朝鮮人の処遇に苦慮した日本政府は、米国の仲介により1951年に韓国政府と協議を始めた。これにたいし韓国政府は、在日朝鮮人の法的地位のほかに、請求権・漁業問題なども議題とすることをとめた¹⁵⁾。こうして始まった日韓会談はいくどかの中断ないし決裂をへて1965年までつづく。このかん韓国では〈6・3闘争〉とよばれる大規模な反対闘争が起こり、ときの朴正熙政権は非常戒厳令を発するにいたったが、対照的に日本ではこれほどの反対運動は起こらなかった。日本では「左翼や革新と言われた人びとを含む日本人のほとんどは、日韓会談での日本側の主張をもっともなものと考えた」し、日韓条約反対者も「日本独占資本の経済侵略批判や反米（米国主導の日米韓軍事同盟批判）」に力点を置いており「過去の清算という視点はかすんでいた」といわれる¹⁶⁾。依然として日本には加害意識が弱く「日本の国民は総じて日韓会談に無関心であった」¹⁷⁾のである。朝鮮軽視・朝鮮差別の内面化は日本人の全体的傾向であり、とりわけ1960年代までは左派とみなされる人々もその例外でなかったとみられている。

いわば「韓国における日韓会談反対運動では、日韓会談は戦前の日本の朝鮮侵略の復活として、日本の朝鮮に対する植民地支配の歴史のなかで意識されているが……日本の反対運動では、戦前のことは切りはなされ、主として現在・将来の不安・危険が主張され、日本の朝鮮侵略の歴史が忘れられている。しかも、両者のあいだに大きな溝があることも日本人にはあまり意識されていない」¹⁸⁾のである。かつて日本が朝鮮を植民地支配していたことの意識ないし自覚が日本でいかに稀薄であるか、そして日本人がいかに朝鮮をなおも軽視し差別しているかがうかがえる。他方で日韓条約以降、日本は韓国にたいする経済侵略を本格化させ、日本の高度経済成長は頂点に近づいてゆく。

14) 渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮』岩波書店、2003年、196-197頁。

15) 高崎宗司『検証 日韓会談』岩波新書、1996年、22-23頁をみよ。

16) 文 京洙「戦後日韓関係と市民社会の課題」354頁、356頁をみよ。

17) 高崎宗司『検証 日韓会談』174頁。

18) 旗田巍『日本人の朝鮮観』5頁。

朝鮮が戦後日本社会において直接的に立ちあらわれたのが在日朝鮮人という存在である。敗戦直後の「焼け跡」時代に闇市での抗争や街頭示威をくりかえした在日朝鮮人のふるまいや「李承晩ライン」による日本漁船の拿捕・抑留などを多くの日本人が目当たりしてきた。そのため敗戦から日韓条約にいたる期間、日本人の朝鮮観・朝鮮人観は「近代史上最悪」であったと文京洙はいう¹⁹⁾。

文京洙は控えめに語るが、日本での在日朝鮮人にたいする持続的で執拗な差別は周知のとおりである。1910年の韓国併合以降、土地調査事業その他によって土地を奪われた朝鮮の農民たちのなかには、食い詰めて日本や満州に渡らざるをえず、日本の都市の末端労働者として暮らす者も多かったが、日本に暮らす朝鮮人たちは日本人よりも安い賃金、日本人よりも長い時間という劣悪で差別的な労働条件のもとで生計を立てることを余儀なくされた。当時は「多くが労働ブローカーによって渡日した朝鮮人労働者の大部分は、日本各地で炭鉱・道路・鉄道・河川・発電工事などの日雇人夫となり、また沖仲仕や工場の見習職工、雑役夫、それに危険な工事や『不潔』な仕事に従事した。植民地人として賃金も日本人労働者の約半分にすぎず、朝鮮人・中国人、被差別部落民、日本人という民族的序列・差別が厳然として作用した」。1945年に朝鮮が解放されると、朝鮮半島に帰るあてがある朝鮮人は帰国してゆくが、帰るあてがないか帰っても生活手段がないなどで帰るに帰れない朝鮮人は、やむをえずそのまま日本に住みつづけた。これらの人々が在日朝鮮人とよばれるが、戦後日本でも在日朝鮮人の仕事といえば「土方、飯場、沖仲仕、古鉄回収業などの肉体労働しかなく、その後しばらくして、遊技業や飲食業、その他サービス業などへの進出がはじまった」のである²⁰⁾。多くの日本人にとって朝鮮人が、やみや犯罪や火焰瓶と結びつけて思い浮かべられている現実を述べた大宅壮一の発言を受けて、布施辰治はこのようにいう——「やみをだれがさしたか、犯罪をだれがさせているかに問題がある。やみの品を買ったさをあかしたくない時には、朝鮮人から買った、賣つた先をあかしたくない場合には、朝鮮人に賣つた、という。こうして朝鮮人の犯罪は大變な数になる」²¹⁾。

「多くの日本人は在日朝鮮人を外国人とは思っていない。もとより日本人とも思っていない。日本人でもなく、また外国人でもない、あいまいな人間とみなしている。『第三国人』という言葉があるが、それは日本人の在日朝鮮人に対する考えを的確に表現したものである。多くの日本人にとって、在日朝鮮人は所属不明の第三国人とみなされている」という旗田巍の指摘は的を射ている。朝鮮人にたいしては依然として「偏見が偏見として意識されないで存在し」、戦前のような「露骨な差別意識はうすれているが、なお形をかえて残っている」といわざるをえない。いくなれば在日朝鮮人は「疎外され差別される人間として生きている」。その疎外や差別のなかで在日朝鮮人は不可避免的に鬱積した感情を蓄積させているのであり、「日本の社会、日本人の意識は、かれらに暴発的行動をおこさせるようなものを多分に含んでいる」のである²²⁾。

暴発的行動の端的なあらわれが小松川事件(1958年)であり寸又峽事件(1968年)であったが、小松川事件について「李珍宇という人物を作り出したのが日本社会である」ことが論じられている。李珍宇はいわば「他人に作り出された客体」を生きざるをえなかった。日本社会におい

19) 文 京洙「日本と韓国、歴史意識の相克」『現代の理論』2010年秋号、40頁、文京洙「戦後日韓関係と市民社会の課題」354頁をみよ。

20) 尹 健次『「在日」を生きるとは』岩波書店、1992年、67頁、239頁をみよ。

21) 座談会「在日朝鮮人の生活と意見 日本人の反省」『中央公論』1952年9月号、84頁。

22) 旗田巍『日本人の朝鮮観』70-77頁をみよ。

て「悪しき人間としての朝鮮人」というイメージが固定する一方、日本人は「否応なしに善良な人間の側に組みこまれてしまう」のであり、「各自の主観的な意志とは無関係に自分のあり方を規定され、われわれの存在そのものによって朝鮮人差別に加担することになる」²³⁾。小松川事件の第二審判決で被告人に「社会の一員としての自己の責任」の缺如が指摘されたが、日本社会で差別され人間性を否定されつづけてきた在日朝鮮人少年に日本「社会の一員としての自己の責任」を要求するのは酷ではないかと批判する大岡昇平は、日本では少数派であった²⁴⁾。そもそも「在日朝鮮人とは……植民地支配によって作り出された存在である」²⁵⁾ののだが、他の力によって作り出されたという在日朝鮮人の本質＝存在（Wesen）規定は、植民地支配終焉後も変わらないのである。

このように考えるさいに思い起こされるのが、かつてユダヤ人問題を自分たちフランス人の問題としてとらえたサルトルである。サルトルによれば、「ユダヤ人」の概念がユダヤ人問題の本質的部分であるが、これは経験的に生まれたものでなく、反ユダヤ主義がつくりだしたものである。この概念がユダヤ人蔑視の根拠にされ、経験を脚色する。そして反ユダヤ主義者は「ユダヤ人」概念にそってユダヤ人を見つけたし、対照的に自己の存在理由と正統性を納得する²⁶⁾。これは、日本人によってつくられた朝鮮人の概念が先立ち、その概念にあてはめて朝鮮人の存在が規定され、朝鮮人差別が横行するのと、酷似しているであろう。

V 〈虚脱〉と意識の連続性——敗戦後日本の社会意識①——

「日本人の朝鮮（ひいてはアジア）への侮りや蔑みの眼差しは、敗戦という未曾有の衝撃を経てもほとんど変わらなかった」²⁷⁾といわれる。朝鮮にたいする侮りや蔑みのみならず、日本の社会全体が、敗戦を経験してもじつは変わらなかったことは、多くの論者が指摘している。「日本の国民生活を支配している仕組みはどこを見ても元のまま、そっくりそのままという気がする」という一文で始まる中野重治「そっくりそのまま」は『改造』1946年3月号に掲載された²⁸⁾。のちに日高六郎はこうする。「戦前から戦後へという日本の歴史は、八月一五日を区切りにして、急速度に変わったということではなく、ずっと連続している側面があるのです。それは、敗戦が外側からもたらされたということと切りはなせないのは言うまでもありません。……絶対天皇制は象徴天皇制となりましたが、天皇制は残りました。なによりも日本資本主義は残りました。……支配層の頭のなかにはむかしのままでしたし、民衆の意識も古いものからなかなか脱却できませんでした。」²⁹⁾。これらは、曆を利用した過去との連続性の宣言、すなわち「昭和」が戦後も中絶しなかったことに、象徴的に示されている³⁰⁾。

敗戦後の数ヶ月、多くの民衆は〈虚脱〉におちいった。〈虚脱〉とは、ひと月ひと月と最悪の

23) 鈴木道彦『越境の時』集英社新書、2007年、65頁、72頁、85頁をみよ。

24) 渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮』190-191頁をみよ。

25) 鈴木道彦『越境の時』49頁。

26) v. Jean-Paul Sartre, *Réflexions sur la question juive*, Gallimard, 1985., pp.12, 18, 173, 178.

27) 文 京洙「戦後日韓関係と市民社会の課題」354頁。

28) 高橋和巳編『戦後文学の思想』〔戦後日本思想大系13〕筑摩書房、1969年、135頁をみよ。

29) 日高六郎『戦後思想を考える』岩波新書、1980年、166-167頁。

30) J. グワー／三浦陽一ほか訳『敗北を抱きしめて』下、岩波書店、2001年、5頁をみよ。

事態にそなえ死を覚悟していた民衆の緊張の糸が切れ、生命が再度あたえられたものの、安堵のあとに疲労と絶望に襲われ、精神的崩壊感を味わうという深い心理的体験であり、それはまた民衆全体の沈滞感や喪失感を意味するが、さらには「もともと達成不可能な戦争目的を追求」していたことによる「根深い疲労状態」や「戦時に蓄積した疲労」を、そして「戦争に負けたというのに、特権階層の連中は戦争中と同じように景気よくやっている」という民衆の思いをも、ふくんでいる³¹⁾。他方でマルクス主義者らは、資本主義社会は恐慌と戦争をまねき崩壊するという「歴史の必然性」をみることができ、敗戦を予測し敗戦の意味を〈認識〉していた。この〈虚脱〉と〈認識〉のうえに、治安維持法廃止や言論の自由を指示してくるGHQの〈力〉があった。「〈力〉と〈認識〉と〈虚脱〉と、この三者の力学的関係のなかで、敗戦直後の思想状況の骨格はつくりあげられる」という把握は適切であろう。同時に「敗戦直後、国内には状況を認識する頭脳は存在していたけれども、歴史を動かす力はなかった」ことも、みとめねばならない³²⁾。

この〈虚脱〉は、いくつかの要素をふくむであろうが、主としてそれまで民衆を押しえつけていた力が除かれたことに起因するものと思われる。「日本の天皇制と軍国主義によって長期にわたって教育され、徹底的に弾圧され、言論を封殺された多くの国民の目には、ポツダム宣言はまさに青天の霹靂であったに違いない³³⁾」のである。この青天の霹靂は「日本人の思想生活にとって猛烈な一撃」であったろうが、その一撃は「思想的な一撃というよりは、むしろ物理的な一撃であったというほうが正しい³⁴⁾」。8月15日までの生活空間が物理的にくずされたのである。

では思想的に日本人は8月15日を境にいかに変貌したか。さしあたりの見通しを先取りしていえば、思想的な変貌はほとんどみられなかった。多くの日本人にとって「解放」とは政治的意味より心理的意味を帯びていた³⁵⁾という場合にも、それは敗戦が心理的感覚における「解放」であったことを指すものであり、敗戦によって日本人が「思想的」に変貌したことを意味するものではない。天皇制思想のもとに従属していながらも天皇制思想にまさるとも劣らぬほど民衆の生活のなかにくいこんでいたのは、庶民的発想法というべき「処世智」であり「世渡り術」であった³⁶⁾。「処世智」や「世渡り術」は多様な形態をとってあらわれるが、ともするとそれらは戦時下の被抑圧的生活の反動で増幅し、自己肯定・現状肯定の私生活主義ないし生活保守主義へと進行する。

VI 自己肯定的生活保守主義——敗戦後日本の社会意識②——

やがて自己肯定的私生活主義・生活保守主義に向かう多くの日本人に共通したと思われる敗戦時の社会心理として安丸良夫は「民衆意識の次元からすれば、敗戦とは日本帝国の崩壊であるよりは、その生活における戦時の異常な悲惨の終焉と常態への復帰を意味³⁷⁾したと論ずる。これ

31) J. グワー／三浦陽一ほか訳『敗北を抱きしめて』上、岩波書店、2001年、98-99頁、120頁をみよ。

32) 日高六郎「戦後思想の発露」『戦後思想と歴史の体験』勁草書房、1974年、56-58頁をみよ。

33) 増島宏「占領前期政治・社会運動の歴史的意義」五十嵐仁編『「戦後革新勢力」の源流』大月書店、2007年、13-14頁。

34) 日高六郎「戦後におけるイデオロギーの動向」『現代イデオロギー』勁草書房、1960年、260頁。

35) J. グワー『敗北を抱きしめて』上、98頁をみよ。

36) 日高六郎「戦後におけるイデオロギーの動向」261-262頁をみよ。

37) 安丸良夫「戦後イデオロギー論」『日本ナショナリズムの前夜』洋泉社新書、2007年、262-263頁。

は、戦争のさなかに「反戦にいたるまでの自発的契機はなかったが、前線においても銃後においても、厭戦気分は確実に拡大していく」状況のなかで迎えた終戦が「悲惨な〈異常〉事態から〈正常〉事態への還帰として思念された」という土方和雄の見方と重なる。土方によれば開戦と終戦とは「自らを超越した〈何者〉かによって、心ならずも非日常的次元にたたき込まれ、また〈何者〉かによってその状況が〈終〉わらせられた」ことであり、「その〈何者〉かは、軍閥、政界指導層、連合国等であっても、自己自身や天皇ではなかった」と意識された。そして「このような意識状態のなかで、旧価値体系との真摯な主体的対決や、加害者としての戦争責任感が登場してくるはずはなかった。敗戦時点において、それを日常性への自然的復帰と受けとった、〈断絶〉をへないこのような精神構造が、戦後段階における天皇や旧支配層にたいする無限抱擁的な〈寛容〉の根底を形成し、これが再生天皇制イデオロギーのひとつの基流となっている」とされる³⁸⁾。力づくで戦争に駆り立てられ、べつの力によって戦争が終えられて〈虚脱〉におちいついた多くの日本人の心中に「旧価値体系との真摯な主体的対決や、加害者としての戦争責任感が登場してくるはずはなかった」という指摘は、的を射ているというべきであろうが、この点のはちにとりあげる。ここでは「戦争に批判的であった人、協力しなかった人はたくさんいた。それは戦争が生活と自由を破壊したからである」³⁹⁾という指摘を受け、戦時下の非日常性ないし〈異常〉事態にたいする国民の嫌悪感、すなわち「戦争が生活と自由を破壊した」ことにたいする嫌悪感に留意したい。

敗戦による〈断絶〉をへない日本人の精神構造について安丸良夫は「多くの民衆は、戦争と敗戦にいたる過程を『ダマサレタ』という論理でとらえて納得したが、そこには、戦争責任をみずからのものとする意識が欠落しているとともに、古い価値とのふかい内面的な対決を経ないままに、いち早くあたらしい価値を受容してゆく姿態が表現されていた」⁴⁰⁾とする。いうなれば「悲惨な〈異常〉事態から〈正常〉事態への還帰」の自覚、破壊された生活と自由にかんする回顧的自覚が深まってゆく勢いを駆って、民衆は自己の生活と自由の肯定へと向かい、それはともすると「大衆の戦後エゴイズム」⁴¹⁾にいたる。敗戦後の日本について藤田省三は、物質的政治的荒野および精神的荒野のもとでの下からの自生的社会形成がおこなわれないうちに、外から系列的機構整序がもちこまれ、共同性をもたない私的個人や小集団のエゴイスティックな雑居の状況が出現し、そこには形骸の整然さがあるだけで人々の見えざる有機的つながりはなかったことを論じている⁴²⁾。

朝鮮戦争特需や「もはや戦後ではない」という意識の広まりをへて、日本は高度経済成長をつづけ、日本の「『経済大国』意識、民族主義的な『国益』意識がつよめられた」⁴³⁾のが1960年代なかば以降である。日高六郎はここに日本人の意識の質的变化が生じていることを論ずる。「高

38) 土方和雄『「日本文化論」と天皇制イデオロギー』新日本出版社、1983年、70-71頁をみよ。なお土方は終戦という用語について「敗戦をこのように言いかえた権力の意図を超えて、かえってこの用語は民衆の意識状態に合致していたように思える」と書きそえている。同箇所をみよ。

39) 石母田正「堅氷をわるもの」『歴史と民族の発見』平凡社ライブラリー、2003年、331頁。

40) 安丸良夫「戦後イデオロギー論」263頁。

41) 栗原彬「大衆の戦後意識」中村政則ほか編『戦後思想と社会意識』岩波書店、2005年、200頁。

42) 日高六郎編『1960年5月19日』岩波新書、1960年、4-5頁をみよ。

43) 芝田進午「戦後四〇年の思想」東京唯物論研究会編『戦後思想の再検討 政治と社会篇』白石書店、1986年、27頁。

度経済成長がつくりだした現在の生活様式を維持拡大したいということが、ほとんどの日本人の願望となった。……ひとりびとりの意識のなかで、また日常のくらしかたそのもののなかで、経済優先の価値観が根をおろし、経済主義に向かうこの「価値観の画一化こそが、意識の深部で進行している」というのである⁴⁴⁾。

個人の私的欲求を権利として解放したことに由来する私生活幸福主義は近代化論によって国家独占資本主義の支配体制のもとにからめとられ、また平和と民主主義にたいする熱望をみたとすのは社会主義ではなく資本主義にもとづく近代化であると喧伝することによって、支配階級は、民衆を大量消費社会に満足させるような、民衆の欲求の深部にとどくような支配イデオロギーを獲得したのである⁴⁵⁾。高度経済成長のなかで日本に「イデオロギーから現実主義への『思想的転換』と『社会変化』」が起こるのは必然であり、経済的にも文化的にも「先進モデル」追従の道を歩むようになる⁴⁶⁾、というわけである。

このような日本の社会意識や生活態度は、後述する上滑りの民主主義、上滑りの近代化と融合して、現状肯定的に増幅していった。一定の生活水準に達した現状(Status Quo)を維持したいという現状肯定意識に浸っているかぎり、歴史意識や歴史的自己意識は生まれない。現在は他のものに頼らずにそれだけで成り立つ存在ではなく、過去の蓄積のうえに、過去によって規定されて成り立つ⁴⁷⁾。現状肯定的私生活主義は、従前より日本に蔓延している集団同調主義と相互作用し、「共産主義より全体主義が新しければ、共産主義を捨てて全体主義へ赴く……民主主義がくれば民主主義に従う⁴⁸⁾」という、竹内好のいう転向文化を生み出す土壌となる。「戦意昂扬・戦争鼓吹のさまざまの言論に代って、民主主義・平和・文化などという言葉が氾濫しはじめ」たが、「こうした変り身の早さにはかえって、権威・権力への一貫した従順性、迎合性、便乗性、つまり変らなさを示している面」がある⁴⁹⁾。日本人は「新しい価値への移行に安易なまでに容易でありえ」、このことは「エゴイズムの連続性」を示しているのである⁵⁰⁾。

VII 上滑りの民主主義 — 敗戦後日本の社会意識③ —

かつての天皇制思想の地位に交代してついたのが西欧的「民主主義」思想であるが、それは民主主義という天皇制イデオロギーが公認されたと揶揄されうるものでしかなかった。西欧的「民主主義」思想はやがて天皇制思想にさえ大きく譲歩せざるをえないほど弱体化し、また天皇制思想よりも拡大したかたちで「たてまえ」化したのである⁵¹⁾。戦後民主主義は生まれたときから「天皇制民主主義」という性格を帯びていたといわれるし、福武直のように「敗戦直後の日本は、民主主義を権威として」受け取ったのであり、民主主義も民主化もいわばGHQの指示によって

44) 日高六郎『戦後思想を考える』83-84頁をみよ。

45) 安丸良夫「戦後イデオロギー論」272-280頁をみよ。

46) 青木保『「日本文化論」の変容』中公文庫、1999年、67頁、114頁をみよ。

47) 中村政則『戦後史』231頁をみよ。

48) 竹内好「近代とは何か」『竹内好全集』第四巻、筑摩書房、1980年、162頁。

49) 鹿野政直『近代日本思想案内』岩波文庫別冊、1999年、333頁。

50) 吉崎祥司「戦後民主主義の現在」東京唯物論研究会編『戦後思想の再検討 政治と社会篇』130頁をみよ。

51) 日高六郎「戦後におけるイデオロギーの動向」264-265頁をみよ。

「与えられた民主化」であったとみなす⁵²⁾のもゆえなきことではない。

敗戦後の日本において「天皇制思想、西欧的民主主義思想、共産主義思想のそれぞれが、それぞれの欠陥なり弱点なりのために、国民を全体的にとらえることに失敗」⁵³⁾した。ひいては、大雑把ないいかたをすれば、近代主義もマルクス主義も「国民を全体的にとらえること」ができなかったのである。

敗戦という未曾有の出来事と屈辱の経験を機に、「古い日本」を支配していた「システム」を否定するという価値観の転換⁵⁴⁾が上から導入され、ないし風潮として伝播し、あらたな価値観として民主主義が受け入れられたようにみえたが、それは上滑りの民主主義であり、「かたわらを素通りして行ったもの」⁵⁵⁾でしかなかった。上滑りであったのは民主主義の制度だけでなく、民主主義の思想、さらには日本人の思想一般についてもいえるであろう。このことは「言葉のお守りの使用」、つまり戦前の「国体」、戦後の「民主」というような正統とみなされる言葉でみずからの立場を擁護しようとするところにもあらわれている⁵⁶⁾。敗戦後の民主主義は、かつて戸坂潤が批判した「自由主義」⁵⁷⁾と類似の位置に置かれていたともいえる。

上滑りする言葉や思想、あるいは、河上徹太郎の「配給された自由」という言葉になぞらえていえば「配給された思想」は、日本人の意識や思考に定着しえなかった。言葉や思想が上滑りし「かたわらを素通りして行った」ということは、経験をともなわなかったことを意味する。「戦後の思考の前提は経験であった。どこまでも経験であった」⁵⁸⁾という藤田省三の指摘は、さしあたりこの点を突いたものでもある。したがって民主主義などの言葉や思想は「戦後の思考」として根づかなかった。

日本は敗戦を体験しなければ民主主義をえられなかったのであり、敗戦後日本の民主主義は「負け取った」民主主義であるといわれる⁵⁹⁾が、敗者としての反省、敗者としての経験が十分になされたとはいえ、ず、「負け取った」民主主義は上滑りなものにとどまった。

上滑りの民主主義が、日本人の朝鮮および朝鮮人にたいする無関心と無知、日本人の加害意識・責任意識・責任意識の欠落のうえに、おおいかぶさった。戦後民主主義は「戦前・戦後を貫通する侵略主義、排外主義、差別主義を否定することに失敗し」、自由・平等・人権などの「内実を具体化すること、すなわち『思想化』することにも有効な力をもちえなかった」し、戦前のマルクス主義が「日本＝アジア＝後進的」という偏見にとらわれたのと同様に戦後のマルクス主義も「ヨーロッパ中心史観＝アジアの停滞論」という思考様式から離れられず、また近代主義は「現実をとり超えた普遍的な近代的精神」に終始してしまったため、敗戦後のマルクス主義も近代主義も差別問題にたいする視点をほとんどもちえなかったことが指摘されている⁶⁰⁾。朝鮮にたいする軽視

52) 中村政則『戦後史』67頁、J. グワー『敗北を抱きしめて』上、14頁、福武直『日本社会の構造』東京大学出版会、1981年、74頁をみよ。

53) 日高六郎「戦後におけるイデオロギーの動向」271頁。

54) 青木保『「日本文化論」の変容』62頁をみよ。

55) 土方和雄『「日本文化論」と天皇制イデオロギー』70頁。

56) 鶴見俊輔「言葉のお守りの使用法について」『鶴見俊輔集』第3巻、筑摩書房、1992年、390頁、鹿野政直『近代日本思想案内』346頁をみよ。

57) 戸坂潤「日本イデオロギー論」『戸坂潤全集』第2巻、勁草書房、1966年、227-228頁をみよ。

58) 藤田省三「戦後の議論の前提」『精神史的考察』平凡社ライブラリー、2003年、221頁。

59) 松本重治『国際日本の将来を考えて』朝日新聞社、1988年、22頁。

60) 尹 健次『異質との共存』岩波書店、1987年、34頁、223-230頁をみよ。

は一貫して放置されているのである。

Ⅷ 朝鮮認知の欠落——敗戦後日本の社会意識④——

「日本は45年8月、欧米に負けた意識はあっても、アジアに負けたという認識はなかったのではないか、とりわけ朝鮮民族解放闘争との抗争史は視野にも入っていなかったのではないか」⁶¹⁾と論じられるように、日本では朝鮮をはじめアジアにたいする屈服の意識も罪責の意識もほとんど起こらなかったといえるし、東京裁判でもアジアが全体的に軽視されていることが指摘されており、これらは、敗戦を経験してもなお朝鮮をふくむアジアの軽視ないし蔑視が日本に生きつづけていたことを示している⁶²⁾。

日本における歴史意識の歪み、加害責任意識欠如の背景として、三浦永光はつぎの4要因をあげる。第1に、日本は米国に負けたのでありアジア諸国に負けたのではなく、アジア諸国は植民地争奪戦の対象であったにすぎない、という見方。第2に、天皇は東京裁判で起訴されず退位もしなかったため、敗戦を境に国家体制が断絶したとは認識されず、そのまま連続していると考えられた点。第3に、公職追放解除により戦時中の重要人物が政界に復帰し、戦後政治が戦時中の政治体質を温存したこと。第4に、国民自身がすくなくとも敗戦直後には国家指導者の戦争責任を追及せず、アジア侵掠や対米開戦のあやまりを追及しなかったこと⁶³⁾。第4点はべつとして、政治的場面での姿勢が世間一般の風潮に作用し、国民の意識形成を方向づけたことが、ここから推測されるであろう。

敗戦時に天皇の責任や加害責任がうやむやにされたことはまた福武直によってつぎのように批判されている。「その名において宣戦した天皇の退位もなかった。戦争裁判で指導者たちが処刑されたにしても、また公職追放があったにしても、戦争責任の徹底的反省は、一億総懺悔ということで解消されてしまった。侵略した諸国への加害者責任も、明確には自覚されなかった。それは、占領軍を進駐軍と称し、敗戦を終戦とよんだところに象徴されている。そして、その占領軍の直接統治ではなく、日本政府を通しての間接統治であったことが、司令部から発せられた変革をゆがめた点もみのがせない」⁶⁴⁾。また「占領政策のもとで賠償が軽減されたことが、日本の植民地支配や戦後の東アジアに対する関心を弱める要因にもなった」⁶⁵⁾というように、国民の意識形成を方向づけるうえで間接的ながら米国の意図が作用していたことをも銘記すべきであろう。

日本では、そもそも日本と異なる固有の朝鮮に目が向けられず、その姿勢が戦前も戦後もつづいたのであり、この意味でまず朝鮮および朝鮮人にかんする認知の欠かないし不足をみとめなければならぬ。中野重治は「われわれ日本人は、一九五〇年六月以後の経過のなかで、アメリカの動員した『国連軍』十六ヵ国の兵隊が朝鮮を理解したほどにも朝鮮を理解しなかつた。しかしそれは、一九四五年八月十五日の朝鮮を理解しなかつたことでもあつた。一九一九年三月一日の事件を理解しなかつたことでもあつた。さらにさかのぼつて、一九一〇年夏の『日韓併合』を理

61) 姜 徳相「日本の朝鮮支配と民衆意識」『歴史学研究別冊特集 東アジア世界の再編と民衆意識』1983年、19頁。

62) 三浦永光『戦争と植民地支配を記憶する』50頁、中村政則『戦後史』32頁をみよ。

63) 三浦永光『戦争と植民地支配を記憶する』49-50頁をみよ。

64) 福武直『日本社会の構造』76頁。

65) 大門正克『戦争と戦後を生きる』小学館、2009年、303頁。

解しなかつたことでもあつた」⁶⁶⁾としるすが、ここから朝鮮を認知しようとする姿勢が日本人に欠如していたことが浮かびあがるだろう。「戦争に批判的であった人、協力しなかった人はたくさんいた。……しかし日本人の生活と自由に直接関係のないことがらのように見えた朝鮮民族への圧迫を自分の問題としてとり上げていた人は意外に少いと思う。それは意識の外にあった……意識しないでもすましてこられた……。この問題は、政治的な解放のあとに長期にわたる精神的課題としてわれわれにのこされているのであって、その重大な意味を知るならば、日本の近代史のこの暗黒の側面にたいするわれわれの無知と無関心は重大なことである」⁶⁷⁾。無知とは認知の欠如であり、無関心とは認知する姿勢の欠如である。朝鮮について「無知で怠慢なことが差別を支えてきた」⁶⁸⁾とともに、「無知で怠慢なこと」は日本人の加害意識、侵略の自覚、責任意識を欠落させる大きな要因になったと考えられる。

無知と無関心ないしは怠慢が一般化する日本で朝鮮やアジアに向かう視線は育たなかった。「大正デモクラシーにも欠如していて『伝統的』にさえなっている他民族への視野の弱さ(金原左門)、敗戦直後のナショナリズム忌避現象、そしてこれらに旧支配の『無責任体系』が醸成した日本社会の『無責任主義』などが合して、『アジアの眼』が日本人一般の自意識となることは容易ではなかった」⁶⁹⁾といえる。1955年に上梓され「天皇制の戦争責任を問う」記述で広汎な読者を得た遠山茂樹らの『昭和史』ですら「植民地やアジア太平洋の人びとへの視点が欠如している点」ではこの例外でなかった⁷⁰⁾。

アジアに向かう視線が育たないことと、アジアをきちんと認知できないこととは、相即する。日本人はアジアを認知できず、朝鮮を認知できなかった。これには単一民族の幻想も作用したであろう。日本人は無言のうちに「日本人」でない異質な存在を同化し、同質的支配空間の自然的拡大という内地延長主義をとってきたのである。「鬼は外、福は内」というような排外と和とが一体化した原理、差別と同化の原理が、日本人の意識のうちにはたらいっているといえる⁷¹⁾。

朝鮮やアジアの認知、植民地支配責任・戦争責任の意識、さらには歴史意識を、なにが欠落せしめたのかは根の深い問題であろう。おそらくこれは、〈虚脱〉が認知をさまたげたのか、自己肯定的生活保守主義が認知をさまたげたのか、という簡単な問題ではなく、むしろ、丸山眞男の「国民の心的傾向なり行動なりを一定の溝に流し込むところの心理的な強制力が問題なのである。それはなまじり明白な理論的構成を持たず、思想的系譜も種々雑多であるだけにその全貌の把握はなかなか困難である」⁷²⁾という論点と重なるものと思われる。

本稿冒頭にしるしたように、また中野重治が「たぶん朝鮮を外国と見ない見方、朝鮮人を外国人と見ない見方……これが一九六五年の今もまだ私たちに残っている事実がこれからの問題の一つではないかと私は思う」⁷³⁾としるしたように、日本人はそもそも朝鮮の存在をみとめず朝鮮を

66) 中野重治「朝鮮問題について」『中野重治全集』第14巻、筑摩書房、1979年、377頁。

67) 石母田正「堅氷をわるもの」331-332頁。

68) 姜徳相「日本の朝鮮支配と民衆意識」19頁。

69) 吉崎祥司「戦後民主主義の現在」147頁。

70) 大門正克『戦争と戦後を生きる』352-353頁をみよ。

71) 尹健次『異質との共存』21頁、80頁、イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波現代文庫、2012年、312頁をみよ。尹健次は排外と和、差別と同化が天皇制秩序のもとで一体化されているという。

72) 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1964年、12頁。

73) 中野重治「朝鮮問題雑感」『中野重治全集』第15巻、筑摩書房、1977年、311頁。

日本のなかに組みこんできたし、朝鮮人を「あいまいな人間」とみなしてきた。中原浩が、朝鮮人を徹底的に〈差別〉せよ⁷⁴⁾という表現で、朝鮮人が日本人と異なる存在であることをしっかりと認知すべきだと主張するのも、このためである。

IX 課 題——むすびにかえて——

集団同調主義、私生活主義、上滑りの民主主義を融合して現状肯定意識を増幅させていった日本人は、日本社会の暗部をみようと思わず、歴史的自己意識・歴史的自己認識を抛棄してきた。朝鮮についても、無関心を決めこみ、みずからの無知を啓こうとはしない。

日本が朝鮮を植民地支配していることを意識しないように仕向けられていた大多数の日本人にとって、朝鮮にたいする意識も認知も、自己の〈経験〉には取りこまれていなかった。藤田省三のいうように「戦後の思考の前提は経験であった。どこまでも経験であった」とすれば、朝鮮にたいする意識や認知は戦後の思考の前提に組みこまれなかったのである。このことは形を変えて、日本にやってきた韓国人のつぎのような印象にもあらわれている。

「韓国で蓄積された、戦争をめぐる私の記憶は間違いだったのだろうか？ 日本のテレビ・映画・新聞をいくら眺めても、韓国の八月に召喚されるような残酷な日本軍人は何処にもいない。家族を軍隊に送らなければならなかった、引き上げの悲惨な体験をした、空襲に堪えなければならなかった、かけがえのない肉親を失った『日本国民』の悲しみに満ちた声だけが聞こえる。その後、一五回の八月を東京で過ごしているが、広島、長崎、終戦の儀式の間に、『日本人』が如何に大変な時代を過ごしたかを丁寧に描くドラマは、主役を変え、音楽を変え作り続けられている。しかも、そこは、『我々＝日本人』の悲しみに満ちた空間であり、このような戦争の記憶を共有しない他者が入る隙間などないのである。」⁷⁵⁾

日本では長きにわたって戦後・戦後日本・戦後日本社会が語られてきて、たとえば「戦後という政治空間を活用して国民みずからが主体的に関与し、その状況をふまえて形成された社会」という意味で「戦後社会」という言葉が用いられている⁷⁶⁾。このような戦後日本社会像は、これまで粗描したように〈朝鮮〉を軽視し排除するなかで形成されたものである。「韓国、そして、朝鮮を、私たちは避けて通ることはできない」⁷⁷⁾ことが、今日どのていど意識されているのだろうか。さらに戦後日本社会は〈朝鮮〉のみならず社会的弱者・少数派を排除し見えなくすることによって成り立っている。この排除や軽視は支配者意識を缺く支配以来のものであろうが、それらがいかにして戦後日本社会像に組みこまれたのか、いいかえれば、既定のものとして語られてきた戦後日本社会という枠組み、ないし戦後日本国家の枠組みはいかにして形成されたのか、しかもそれらが意識されざるところで形成されたことに留意しつつ、問われるべきである。これがおそらく、私たちが戦後日本の経験をふりかえりつつ今後とりくまねばならない論点のひとつであろう。

〈朝鮮〉を缺落させたところで成り立っている戦後日本社会は本質的に歪みを内蔵している。

74) 座談会「日韓問題と日本の知識人」『現代の眼』1966年2月、60頁。

75) 高 榮蘭『「戦後」というイデオロギー』藤原書店、2010年、9-10頁。

76) 荒川章二『豊かさへの渴望』小学館、2009年、11頁。

77) 小田実『私と朝鮮』筑摩書房、1977年、246頁。

論点をたんなる日本人論に回収することなく、戦後日本社会を歪めてきたなんらかの〈力〉、おそらくは支配イデオロギーを、分析することが課題となる。

もうひとつ課題をあげるとすれば、私たちの贖罪意識をどのように発揮すべきかが顧みられねばならない。これについて、さきに引いた中原浩がラディカルで本質的な発言をしている。

……われわれが過去に犯した植民地主義に責任をとるということは、なにも一億総ざんげして、頭をまるめて坊主になるということじゃない。また賠償金を山ほど積み上げて、のしをつけて進呈するといったことでもない。まさにこのような植民地主義を必然としてきた、いままた必然としつつある、日本独占資本主義の経済的・社会的体制を根底から打倒すること以外に、この問題の真の解決はないと思います。そして、こうしたわれわれの側の反体制的・革命的行動を媒介として、はじめてわれわれは朝鮮人の側の民族的統一を求めるナショナリズム運動と国際的連帯を結ぶことができる、そんな風に考えるわけです⁷⁸⁾。

これは日韓条約締結直前の1965年の座談会での発言で、古めかしい言葉が目につくが、しかし今日でも傾聴に値する思想をふくんでいると思われる。この思想は、フランス人がアルジェリア人民側に立って植民地の圧政からアルジェリア人とフランス人とを同時に解放放つべくたたかうというサルトルの思想と重なるであろう⁷⁹⁾。そこから連帯が生まれうる。おそらく連帯とは、人々がそれぞれの場にそくして、他の地にありながら同じ境遇にある人々と連携するものであろうが、そのような連帯は、自分の眼前の課題が他の地の人々の課題とつながっているという認識のうえに成り立つといえる。

「合州国には黒人問題など存在しない。あるのは白人問題だ」(Richard Wright)という言葉を受けてサルトルは、反ユダヤ主義はユダヤ人の問題ではない、私たちの問題である⁸⁰⁾と述べており、また中野重治は「朝鮮問題を理解することは日本人にとって日本問題を理解することになるのに近い⁸¹⁾」と1959年に示唆している。そして歴史家の姜徳相は「明治以来の侵略と支配のなかで形成固定化してきた差別意識をいつまでも惰性的にもちつづけることが日本にとってなにを意味するのか、日本人問題として問いなおす時がきているように思う⁸²⁾」と書いている。

ことは朝鮮問題や朝鮮人問題ではなく、日本人問題なのである。

* 本稿を、小林真之先生にささげる。

78) 座談会「日韓問題と日本の知識人」59頁。

79) v. Jean-Paul Sartre, *Situations*, V, Gallimard, 1964., p.48.

80) v. Jean-Paul Sartre, *Réflexions sur la question juive*, p.183.

81) 中野重治「朝鮮問題について」383頁。

82) 姜 徳相「日本の朝鮮支配と民衆意識」19頁。